

ハイカラな西洋文化を深く吸い込みながら発展してきたミナト神戸の元町に「柴田音吉洋服店」はある。開港から15年後の1883年(明治16年)、居留地の英国人の店で修業した初代「音吉」(1853~1923年)が、注文紳士服を手がけるテーラーを開業したのが始まりだ。文明開化は、日本に「洋服の時代」の到来を告げた。神戸では、多くの職人たちが腕を競い合い、その技術とセンスは、やがて「神戸洋服」として称賛されるようになった。

服地や型紙が整然と並ぶ今の「音吉」の店には、初代が仕立てた明治の元勲、伊藤博文の黒いフロックコートが飾られている。顧客には藤田財閥を興した藤田伝三郎や、松下電器産業を創業した松下幸之助ら財界トップたちも名を連ねた。

「ほら、うちの洋服には襟の裏に、小さな店のラベルが付いているだけでしょ。初代は日本人で最初に洋服

作りの修業をしたテーラー。ほかの店と区別する必要がなかったのです。4代目の現社長、柴田音吉(57)は胸を張る。

ラベルには、「〇」に「金」の屋号。かつて、このマルギンは、質入れる時に威力を発揮したというが、それは余談。「初代は、金の字をばらばらにして『人二八、一(しんぽう)が一番』と読ませたのです」

洋服作りは、一回針を使ったかでも手間を表す。ここでは、最低でも上着は6万針、ズボン3万針。「すいてる時でも、仕上がりに1か月かかります」といふ。1着、最低でも20万円程度。だが、10年間は着られるという丈夫さと上質感、着心地の良さが、顧客をひきつけてきた。

体に触れることが許されなかった明治天皇の洋服を、採寸せずに仕立てた逸話が残る初代。毛織物を学ぶため、政府派遣でフランス・リヨンに留学した2代目(1886~1934年)。先代の3代目は、戦時下の混乱もあって「音吉」でなく本名

師

あり

弟

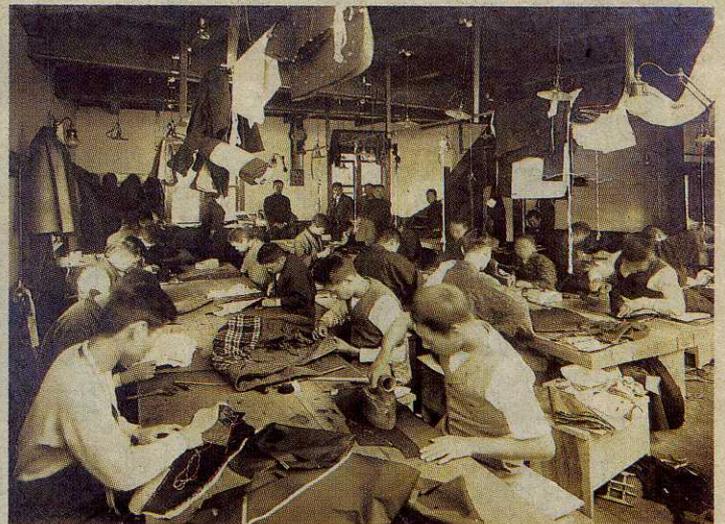
あり

神戸洋服

着心地 質感 耐久性

4代受け継ぐ伝統

震災時にも守り抜く



明治時代末ごろの柴田音吉洋服店での作業風景(柴田さん提供)

型紙のかたちをした「日本近代洋服発祥の地」の顕彰碑(神戸市中央区の東遊園地で)

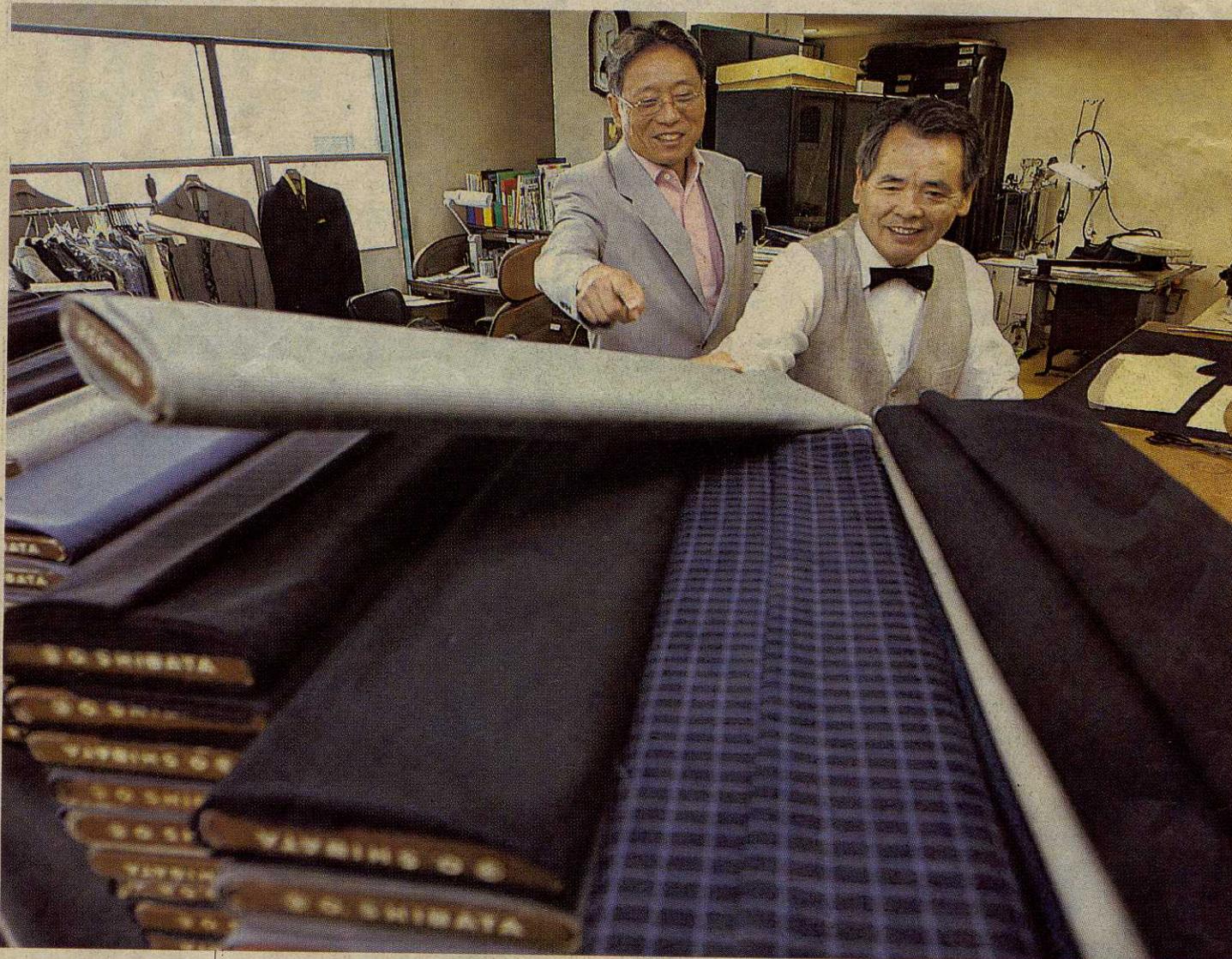


の高明で通し、戦後、店の復興に奔走した。4代目の柴田は、大学を出た頃、先代から「ヨーロッパを見てこい。百聞は一見にしかずや」と勧められて、ロンドンに留学。フランス、ドイツ、イタリアにも出かけ、本場の

洋服作りの現場を見て回った。だが、それ以外には不思議と、仕事のやり方に口を挟まれた記憶はない。そんな先代の態度が、阪神大震災で被災した時だけは違った。「戦争では日本中が焼け野原になったんや。頑張って、営業を続けんとあか

稲沢は、客が歩き方、姿勢を左右の筋肉で張る。採寸の前には張を解きほぐす人の品格、風格から、寸法には本當の体形を見縫製にも細心「吉」の店に来るたき込んだのが田中常三郎(1955年)も「関西わたれた洋服づく

「地」が常三糸と横目」を生地にゆがみ沢の縫が「こい」とてみるになつ



稲沢治徳工場長(右)と服地を選ぶ4代目の柴田音吉社長。「商売を続けるということは、辛抱するということ」(神戸市中央区) 一笹井利恵子撮影

採寸、裁断、縫製
 着る人の風格も
 すきなく仕上げ

洋服作りの工程は、服地選び、裁断、縫製と大きく三つに分かれる。服地を仕切る柴田の右腕で、裁断を得意とし品質に目を光らせるのが稲沢治徳(68)。20歳代半ばに職人として採用され、4年後には20人余の従業員らを指導する職長に抜きさされ、今は工場長の肩書を持つ。

単火で焼け、近くに再建したレンガ造りの店は、震災で壁がはがれるなど「全壊」の被害を受けた。店には受け継がれた約4万人分の型紙が残っていた。柴田は倒壊が心配で立ち入りを禁じたが、職人たちは、こっそりと店に入り、約4000人分の型紙を取り出してきた。「怒っているのやら、悪いのやら」。だが、地震発生から1か月余りで、ビルの空室で仮営業にこぎつけたとき、柴田は、家業を守り、技を伝え残すことの重みを、先代や職人たちから教えられた思いがした。

【補遺】

補遺

数百人いた職人
 現在40~50人に

神戸洋服の歴史は1868 物師」に対して、神戸の

「音吉」の店
 稲沢。常三郎の

していないと。間の住み込みが その同じ作業男、謙司(68)も究める」と言わ片手にドイツ語読み、技を磨いた。4年前、黄綬常三郎は「くなことではなかな40年以上前に常ニングを着て臨ピン」としていの命。どこに着古い服やは思